

平成26年度「ソーシャル・ビッグデータ利活用・基盤技術の研究開発」

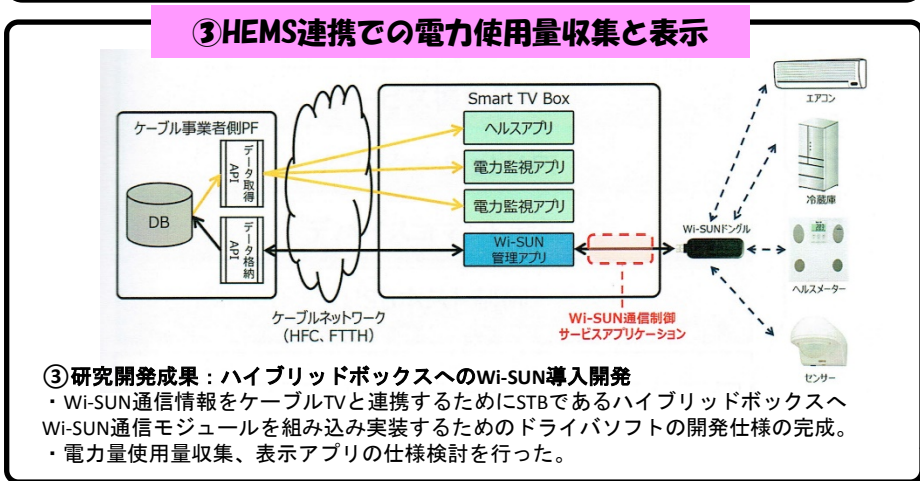
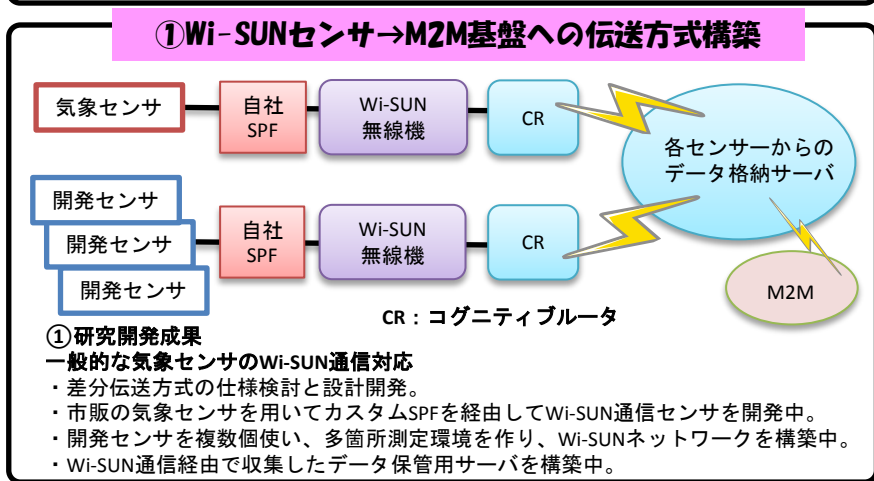
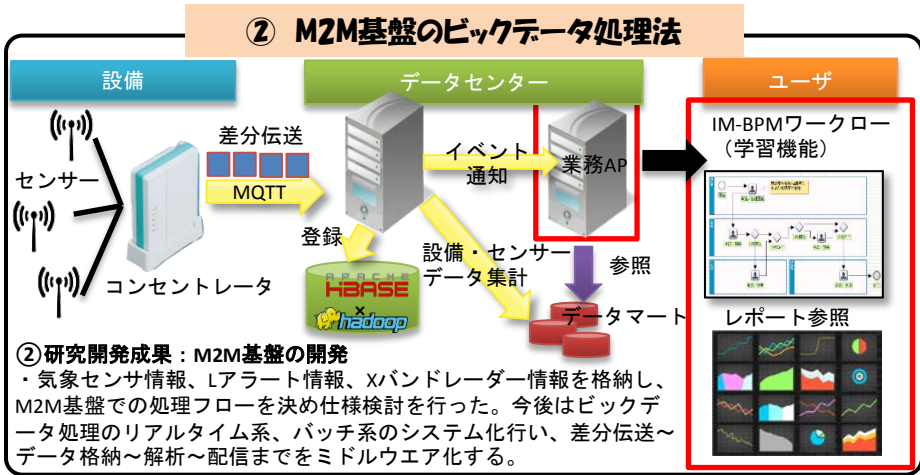
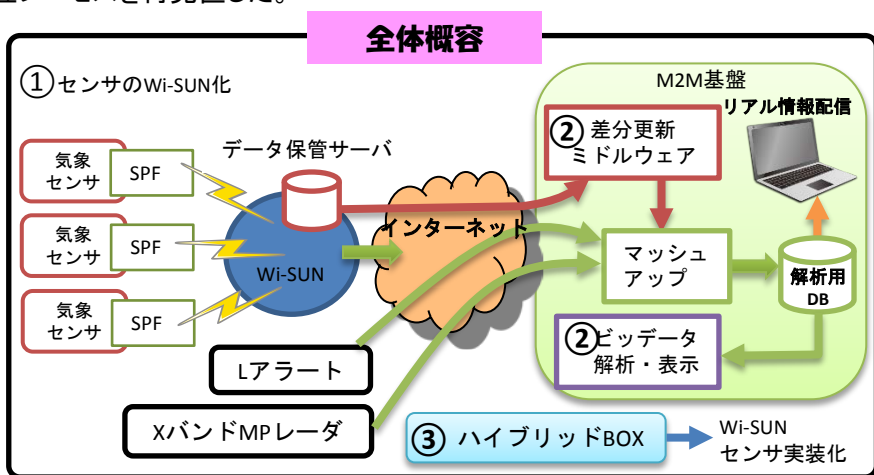
採択番号:178A08 降水レーダとセンサーネットワークによる地域気象観測・予測と防災・エネルギー管理

1. 実施機関・研究開発期間・研究開発予算

- ◆実施機関 NPO中央コリドー情報通信研究所、エリアポータル(株)、山梨大学、日本ケーブルラボ、(株)NTTデータインフラマート
- ◆研究開発期間 H.26~H.27
- ◆研究開発予算 総額40百万円(平成26年度 20百万円)

2. 研究開発の目標 狭域な気象センサデータと広域な公共情報コモンズ情報(Lアラート)をM2M基盤上に取り込み結合させる。これにより、県単位から市町村レベルや、さらにはピンポイントの場所の気象情報を把握することを目標とする。

3. 研究開発の成果 全体システム仕様の検討を行い、入力、出力、処理部分のパートに分けて設計開発した。本研究の骨格を成すビックデータ処理の処理プロセスを再見直した。



4. これまで得られた成果(特許出願や論文発表等)

	国内出願	外国出願	研究論文	その他研究発表	プレスリリース 報道	展示会	標準化提案
降水レーダとセンサー ネットワークによる地域 気象観測・予測と防災・ エネルギーマネージメン トに関する研究開発	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

※成果数は累計件数、()内は当該年度の件数です。

5. 今後の研究開発計画

本研究の骨幹となるビックデータ処理は、当初リアルタイム系処理と、バッチ系処理の2系統で考えていたが、コンピュータリソースが2重にかかることが判明し、効率が悪いのみならず、成果展開時の大きなネックとなる。NTTデータイントラマートと協議した結果、処理系を一本化した設計に変更した。この事により、IoTからさらに進化したIoE(Internet of Everything) 対応する事が容易で、ニューラルネット等のAI機能を使った自動学習機能も備えた拡張が可能となった。やはり社会実装はIoEに対応し、プロセスも自動学習した上で、リアルタイム系処理とバッチ系処理の双方をひとつの処理系で扱う必要がある。この点は、次年度以降に、自治体や電力会社と詰めていきたい。今回の測定ポイント(センサー数)が少ないので、より本番に近い状況にするためにはセンサー数を100~200ぐらいに増加する必要あり。